

疼痛に対する最新の理学療法 治療効果を最大化するための 理論と実践

疼痛は理学療法の主たる治療対象となる症状であり、その概念、疼痛モデル、捉え方、介入方法は急速に変化している。理学療法士はその変化に対応し、患者の苦しみを軽減する努力を怠ってはならない。しかし、その変化が急速であるがゆえ、情報が混乱している状況がうかがえる。そこで本特集では、疼痛に関する最新の情報をご提示いただき、さまざまな状況での実践例を通して具体的な介入方法について示していただいた。

非侵襲的脳刺激法による鎮痛効果 大鶴直史

開頭することなく脳を刺激できる非侵襲的脳刺激法の臨床応用に向けた研究が進められている。疼痛に対しては、一次運動野および背外側前頭前野を主要なターゲット領域として、鎮痛効果が報告されてきた。これらの非侵襲的脳刺激をリハビリテーションと組み合わせることによって、われわれが行う運動療法の鎮痛効果を向上させてくれる可能性がある。

恐怖条件付けの理論と理学療法への応用 前田吉樹

恐怖-回避モデルは痛みの慢性化のメカニズムとして臨床で広く受け入れられている。痛みの恐怖は、一種の「恐怖条件付け」によって獲得・般化され、痛みの慢性化へとつながる。痛みの恐怖の評価で重要なことは、痛みに対する患者の考えを聴取し、何を恐れているのかを明確にすることである。明確になった恐怖に対し段階的に慣れさせていく「段階的曝露療法」が慢性痛疾患への介入として有効とされている。

産業理学療法における腰痛対策 坪井大和

近年、労働者を対象とした理学療法として産業理学療法が着目を集めている。しかしながら、当該分野で活躍する理学療法士の数はまだまだ少ない。そこで本稿では、産業理学療法で大きなターゲットの1つとなる腰痛にフォーカスし、産業理学療法を実践するうえで有用な疫学的情報、評価、介入のポイントを中心に解説していく。

変形性膝関節症における classification を用いた介入 田中 創, 他

変形性膝関節症に対する効果的な理学療法を実施するうえでは、初期評価時の classification が重要である。本稿ではこれまで報告されている変形性膝関節症の classification の動向を取り上げ、その課題と限界点について述べる。そのうえで、われわれが実践している痛み関連因子と身体知覚の指標を用いた classification を紹介する。また、その classification の結果に基づいた介入例について紹介する。

疼痛リハビリテーションに対する virtual reality の可能性 今井亮太

近年、最先端リハビリテーションの1つである virtual reality (VR) は、医療業界で着目され、ペインリハビリテーションへの応用も加速している。VR は、“楽しいゲーム” というイメージが強いが、リハビリテーションへの可能性を秘めている。本稿では、慢性疼痛患者が有する運動恐怖に焦点を当て、VR の有効性を述べていきたい。

急性痛の慢性化予防のための理学療法 平川善之, 他

急性痛の慢性化を予防するために理学療法士の果たす役割は大きい。疼痛強度を始め、患部の状態や患者の心理状態、感作など包括的な評価を行ったうえで、医師・看護師・薬剤師など多職種の情報を取り入れて、患者の状態を総合的に捉えることが必要となる。そのうえで、病期に適した理学療法戦略を実施する必要がある。本稿ではそのための理論的背景と具体的な実践方法を紹介する。

慢性痛に対する集学的リハビリテーション 久郷真人, 他

慢性痛に対する集学的リハビリテーションでは、患者を生物心理社会的モデルで捉え、痛みのセルフマネジメントが可能となるよう、多職種が共通の目標に向かって多角的・包括的なリハビリテーションを行うことが重要である。本稿では、集学的リハビリテーションの概要および当院におけるその実際について解説し、最後に症例を供覧する。